

## 忘却が早すぎる

四月の終わり、「九月入学・始業」の話が急浮上した。メディア経由の情報ではないが、グローバル化の掛け声も後押しして、賛成とする人も多いようだ。

ただし、教育の現場にいる者として、現状は説明しておきたい。本学でも明日からの前期開講に向けて、初の試みの全面遠隔授業の準備、IT環境が不十分な学生への対応、今後の行事や入試に向けた調整など、「いま、ここ」の問題解決に追われている。学生も試行錯誤しながら、遠隔授業への対応を試みている。緊急事態宣言の行方も不透明な中、教員、学生ともに何とか前期の授業を成立させていこうと知恵を絞り、対応している状況だ。

このような中で「九月入学・始業」の検討や実施が決定すれば、それに割く膨大な時間が必要となり、現場の大切な人材も奪われることは間違いない。こうした現実には発生する課題をどう考えているのか。

半年前のことを思い出すべきだ。それは昨年十一月に英語民間試験活用が急遽延期になった件だ。大学入試改革の目玉として二〇一三年頃から議論が始まったが、結局約六年間を費やしても実現できなかった。スローガンを唱えるのは簡単だ。だが実際に制度を革新し、現実に実現することは大変な作業なのだ。思えば、この時もグローバル化が「枕ことば」だった。

「試験」とは異なる問題だ、との意見もある。しかし今回はより複雑だ。「九月入学・始業」は、幼児教育から大学（院）、就活にまで関わり、それに伴う行事や各種資格試験などの時期の変更が必要になる。それらに対応してビジネスの需要期や方法も変わるだろう。最も根源的なのは人々の順応だが、コロナ禍からの再建に加えて、身体やメンタルが対応できるのか。

さらに言えば、グローバル化のあり方さえ、今後の変化は未知数だ。現時点でどのような話を持ち出すのは、「未来展望」ではなく、目先を変えたい「転進」の発想に思えてならない。なぜ全力を尽くして、「いま、ここ」の問題解決に取り組まないのか。

（静岡文化芸術大学教授）

2020.5.10

中日新聞（朝刊）P.5